

元田舎教師の戦中回顧

西山 欣爾



旧大連大和ホテル

「満鮮旅行」

昭和一五年五月一日より三〇日まで一五日間、修学旅行として満州、朝鮮を旅行した。卒業学年の約百名で、前年と今回の二回だけで打ち切りとなった。戦争に突入したからである。

参加できた私たちは実に幸いだった。後々まで私の対中国観、大陸観、島国日本人観にかなりの影響を与えたことは確かである。百聞は一見に如かず、歩いてみなければ分からない。岡山駅より列車で敦賀に行き、すぐ乗船した。日暮れである。船中に三泊した。船のいちばん底、倉庫にでもなるようなところで、板敷き。そこにごろごろ過ごしたのである。退屈だった。時々甲板に出て見た。何もない。ただ見えるのは空と海ばかり。水平線が船をぐるりと丸く取り巻き、船がいちばん高い所にあるようだ。地球は丸い、海は広いと実感した。途中一回だけこちらに来る船と出会った。唯それだけ。

清津に上陸し、列車で囃們を通り国境を越えた。このあたり、半島人が多いようで、満州の

実感は全くない。やがて、牡丹江に着き一泊する。日暮れに着き早朝に発ったから、街の様子はよく分からない。パニックのような家並みで、寂しい感じの小さな町だった。それが今日では四〇余万人の立派な都市になっているという。ハルビンに向かってまっ直ぐに走る。大陸だ。列車は広軌、車内は広い。座席は三人掛けられる。棚の上でも眠られる。柔道二段の山本君が棚のぼり寝たら、先生に注意され、あわてて降りた。満人が坐っている。「プーシー、プーシー」と言えば、立って逃げていく。どんな意味か知らないが、そう言えば座席を空けてもらえ

る。車外は草原。山といっても極くくだらかな傾斜。広い。所々日本軍人の墓標が建っている。匪賊にやられたんだな。「何が匪賊だ。勝手に俺達の耕地を奪いあがって。」と、彼らの叫びが聞こえる。警乗兵が最後尾の車両に乗り込む。弾薬箱、機銃を積み込む。少し物騒だ。列車はひた走り、まっ直ぐ三時間くらいで一駅。

ハルビンに着いた。異国情緒である。広場があり、それを中心に街路は放射状に出ている。

キタイスカヤ街、ヤンチョー(人力車、マーチヨ(馬車)がたくさん走る。白系露人(ロシア革命に抗し、追われて逃れた人々という)がいる。背が高く色が白い。ハルビンはロシア人が作った町だという。そうだろう。三分の一は白系露人だから。街の名にもロシア語が残る。全く異国風である。物珍しさに白系露人の店に入って娘さんを見たりした。買い物をするでもないのに。忠霊塔に参る。まっ直ぐ高い塔。沖禎介、横川省三がスパイとして捕らえられ、目かくしして銃殺されたところだ。彼らは朝鮮では英雄だ。そうだろう。ハルビン駅頭、伊藤博文が安重根に射殺されたところだ。

南満州鉄道で新京(長春)へ向かう。広い。農夫が二頭だてのすきで耕していく。一日で向こうに行きつくのか。それとも引き返してここまで戻れるのかと思ったりする。果てしない一面畑。地平線が丸く取り巻く。山一つない。「赤い夕日の満州蒙古」、夕日が実に大きい。日本の夕日と比較ならぬ。赤い。なかなか沈まない。大陸だ。彼らはこんな土地で呼吸しているのだ。

新京に着く。長春だ。幅のうんと広いまっ直ぐな大同大街。実に立派な通りだ。関東軍司令官の官邸が堂々と通りに面して建っている。それに比べ、満州国皇帝の住まいはひっそりと奥まったところにある。二つを比べれば、誰だつてこれが「五族協和」かと疑う。傀儡政権だということはずぐ分かる。それに、旧満州ほどの町でも、よい所、よい通り、広場は、皆日本人の商店だ。役所だ。満州軍が訓練している。日本軍に似たような、少し違うような感じである。列車に乗る。日本人優先。満軍の兵士がいて、満漢人が先に乗ろうとすると、銃の台尻で抑えて日本人を先にする。満鉄は満州の大動脈。すべての物資がこの鉄道で大連に運ばれる。大豆、こすりゃん、石炭、鉄鉱。日本へ日本へと運ばれる。当時日本人の食事の三べんの一べんは満州からだと言われた。

一泊して奉天(瀋陽)に向かう。旧都である。駅を降りると苦力がいっぱい駅の入り口にごろ寝をしている。驚いたことに彼らには鱗がある。入浴しないから、何十年もの垢がたまつて、厚さが一センチあるか二センチあるのか。それがひび割れて丁度鱗のようになってる。手と言わず、脚、腹、鱗である。これには実に驚いた。そんな連中が何十人も駅頭にごろ寝している。中には袋のような荷物をかかえている者もいる。何を待つのか、列車か、仕事か。山東省あたりから来たのだという。彼らの望みは、大衆浴場、

そこで垢を落として、その後女を抱くののだという。それが生涯の望み、一度でいいからかなえたいのだ。柳条溝に行つてみる。満州事変発生地の、日本軍のしかけたところ。直ぐ近くに北大営がある。張作霖、学良の軍営のあつたところ。いろいろな武器が並べてあつた。撫順の炭田を見る。幅一里余、長さ二里余とか。大きい。引き込みの貨車が実に小さく見える。露天掘りだ。起重機でガバツ、ガバツと掘つて貨車につぎ込む。黒ダイヤと呼ばれ、真つ黒で光沢があり、日本の石炭とすつかり違う。街中ごろごろ散らかつており、バケツ一杯ぐらいすぐ集められる。石炭の町である。これも多く日本へ送られる。遠くに鞍山の製鉄所の煙突が見える。思いつた。出にということ、五人で中国料理を食べに行つた。ことばは通じない。コップをかたむけるまねをすると、酒を持ってきた。一皿、一皿、済んだら又一皿、だんだんおいしくなる。腹はすでにマンタン。合計十二皿。五人で懸命に食べたが、食い切れない。最後には大皿に鯉のまる煮。それが骨まで食べられる。すべて油で調理。しめて五百円。この味だけは忘れられない。一泊。

満鉄の「アジア号」を見ようと待ち構えた。今日の日本の新幹線。広軌だからそれよりずっと大きい。堂々たるものだ。吹き飛ばように走る。南へ南へと。旅順に着いた。港が見える。湾内が隅々まで見渡せる。ロシアの極東艦隊の

根拠地。広瀬中佐らが湾口を開き、艦隊が出られないようにしようと思塞に向かい、ついに敵弾にたおれたところ。それを見下ろす峰の一つ、東冠山に向かった。案内はこの攻防戦に参加した老兵士。「ところどころするな。この地には坪七人の戦友の血が流れているのだぞ。」と叱咤された。この戦いは実にすさまじかった。味方の武器といえは村田銃のみ。西南の役に村田新人が考案したものである。一発ずつ込めて撃つ手間のかかる銃である。敵は山頂に野砲、山砲、機関銃、全面に鉄条網、壕を掘りめぐらし、頭だけ出して撃つ。突貫、突貫、何回も決死隊を出す。敵は山頂から撃ち下ろす。鉄条網まで進むが悉く戦死。溝を掘つて近づくと、串刺しになる。ジグザグに掘つて進む、あつちの山こつちの山からねらい撃ち。地下に穴を掘つて進むも感づかれ、更にその下を掘つて逆に下から爆薬を仕込まれ、全員穴埋めとなる。これを最後と決死隊が限らない犠牲者を出しながら、鉄条網をつき破り突入した方がいいが、全く啞然。眼前には深い大きな堀が横たわり、飛び降りることもできない。名にし負う難攻不落の要塞である。一山ぐるりとトンネルが取り巻き、その内側は山麓からは分かれぬが掘り下げられた通路となつて

いるのだ。トンネルはペイントというぐり石まじりの硬いコンクリートの厚さ四〇〜五〇センチぐらいの壁で出来たトンネル。大きなトンネルの中にロシア兵は、食糧、弾薬、菓子オヤツ

まで何年でも耐えられるように空間を作っていたのだ。そしてトンネルの内側、山頂側は庭のような通路でぐるりと山を取り巻いている。これには乃木軍は驚いた。攻める方法がない。大山元帥、児玉源太郎、満州にある日本軍、国内の日本人、今か今か、まだ落ちぬか乃木は何をしておる、もつと攻撃しろ、方法があるだろうと矢の催促。二人の愛児を戦死させ、乃木將軍の苦悩は深かった。どんな方法があるろう。兵と村田銃だけ。突撃以外に何があるろう。今日考えても方法はない。幸いにしてイタリヤから榴弾砲を二門入手できた。それを備え付かるのにか月かかった。地面を平らに厚いコンクリートで固め、台座をつくり、その上に砲をすえる。それに一か月余。一日千秋の思いだったに違いない。出来上がった。かたずを飲んで山頂めがけて撃った。山をもとどろかす轟音だった。トンネルの一角が崩れ現れた。待ちに待った時だ。それつと決死隊がそこに突入した。しかし、これは全山からみたらほんのごくささやかな一隅。これからの攻防が実に大変だった。土嚢を積み重ねて部屋をしきり、何日も対峙した。退屈の余り土嚢の透き間から、キャラメルや煙草などのやり取りさえしたと言う。外に一步でも出れば射殺される。夜のサーチライトの光の逃げたすきに数歩出て壁にくっついて動かない。光が逃げた時、又数歩進む。そうして敵の部屋の外にたどり着き、火薬をしこむ。爆破する。やっ

と一郭前進する。そうして何日もかけ敵を追い詰めるのだが、そこから山頂の方へあがるのが大変。一人が土嚢を持ってそこへ突き進む。又殺される。土嚢と人と交互に七人も八人も屍を重ね、その上を踏み越えて上へよじ登ったのだ。正に屍山決河である。かくして東冠山、二百三高地は落ちた。水師營で乃木將軍とステッセル会見。なつめの木もそのままあった。乃木將軍は十五年戦争の大將、司令官と全く違う。山下奉文とパージバルを比べてみるがいい。大連に一泊。入浴後のさわやかさ。一時間でぬれタオルがきれいに乾く。奉天に引き返し、平壤（ピョンヤン）、京城（ソウル）にそれぞれ一泊、閑釜連絡船で下関に帰った。なんと日本は小さいことか。全く箱庭のようだ。小さい山に小さい川。小さな橋にちよぼちよぼと田、畑、山。きれいな瓦屋根。こんなに小さかったのか、こんなに美しかったのかと驚いた。それに比べ悠久の大陸、あせらず静かに時が満ちるのを待つ。多くの詩人、墨客、思想家をはぐくんだ。日本文化と中国文化の違いを少しは考えるようになった。

着任——激動の年

昭和一六年、学校を卒業し、郷里の国民学校に赴任した。都市の学校にとも思ったが、どうせ兵隊に取られるのだから僅かばかりの期間、よそで過ごしても仕方があるまいと父母に説得

されて村の学校に決めた。昭和一六年は国民学校と改称された年である。「皇国民」を鍊成するのである。当時中和国民学校は生徒が二百五十人ぐらいいた。戦陣訓が示達され、治安維持法が改悪され、東条内閣が成立し、太平洋戦争に突入した年である。内外共に多事多難。空気はピンと張りつめていた。

すさまじい「中和勤皇まこと結び」

着任して間もなく遭遇したのは「まことむすび」とのかかわり合いである。まことむすびは、西山直がどこからか飄然と帰って来て、中和神社の社務所に「皇道義塾」と看板を掲げた時に始まる。彼は神官の次男である。幼い時から荒々しい気性で、家の槍を持ち出しては振り回していたという。初めの中は誰も訪れていなかったが、その内、一人、二人と訪うようになり、半年ばかりで村の青年の大半が入団した。極端な右翼団体である。天皇に対して不敬な言動があれば絶対に許さないと気魄に満ちていた。正月一〇日頃、雪の積もる零下一〇度の中、ふんどし一つで一キロばかりひた走って清流に浸り祝詞を唱え、「やまとばたらき大和勳」という独特な体操をして、寒さに凍えながら走り帰って来るというような事もしていた。その内、西山直は上京し、平沼騏一郎を狙撃したが失敗した。ラジオでも報道され、村中話題になった。また、永田鉄山軍務局長を刺殺した相沢三郎中

佐も来て講演したことがあるという。村役場の第一書記美甘護、私のすぐ上席の岡田良治氏が所謂三羽鳥であった。村の光井巡査が学校に来て火鉢に手をかざし暖まっていると、光井巡査は何も言わぬのに、岡田が「貴様ら東條幕府の犬が。目のつけどころが違やせぬか。うるちよろしやがって。」と叱り上げた。光井は殆ど何も言わず帰っていった。またしても岡田にこてんばあにやられた。また、美甘は、よく私の家に寄って父と議論し、またしても「あんたは日本人ですか」と非難していた。美甘「西山さん、日本は勝つと思われませんか。」父「さあなあ、この調子では?」、美甘「あんたは、日本人ですか。」父「うん、その前に人間だよ。」と、こんな調子。「中和勤皇まことむすび」「八束勤皇まことむすび」は正に飛ぶ鳥を落とす勢いであった。その岡田は、私より三年上級で、剣道は強く薩摩のジゲン流、一升餅もパクリという大食漢。子どもには歴史教育と大和働体操だけという変わった先生だった。その先生が高等科一年生まで四か年持ち上がり。従って学力は低く(先生はそう思っていない)、他の教師の言うことは校長の言といても聞かない。困った存在だった。新任の私は、その一級下の初等科六年を受け持った。ところが、高一の生徒が私のクラスの勉強の邪魔をして困った。たとえば勝手に窓を開けてのぞいて見る。後ろのドアから女の子を入らせるなど。それで、私もひどく彼等

を叱責したものであった。岡田は知らぬ顔であった。平沼事件があつて、西山直は刑に服し、岡田は行方知れずとなつた。校長は退職された。よい先生だったので、間もなく村長に返り咲いた。敗戦後、マックアーサーが日本に進駐し、いの一番に「中和勤皇まことむすび」は公職追放になつた。八束も同断。朝日新聞のトップに出た。後に西山直は、島根県護国団団長になつた。私の家で彼とさし向かいで盃を交わし、平沼狙撃の一部始終を詳しく聞いたものだった。

気の抜けた軍事講習

そんなことで、まことむすびの禍からどうにか逃れ、二年間は授業もできた。しかし、戦局が段々厳しくなるにつれそうもいかなかった。昭和一九年、一泊二日の軍事講習会が玉野市渋川であり、参加を命ぜられた。教官は海軍二等兵曹。「貴様らは、常日頃子どもの前でえらそうにしているのだから、これからビシッと絞つてやる。」と開口一番である。やれやれえらいことだと緊張していると、いきなり海の向こう、空低く米軍機が飛んで来る。「それっ。」と松林の中に逃げ込んで、敵機の去るのを待った。もう大丈夫と整列するとまた飛行機。おかげで初日も二日目も全く訓練にならず、松林の中で二等兵曹との雑談で過ぎた。「連合艦隊は存在するんですか。」「船が三隻集まれば連合艦隊じゃ。ハッ、ハッ、ハ。」といった調子であった。帰り

に又玉野造船所あたりで空襲があり、敵機二機。急いでトンネルの中に入った。造船所の船からパンパンと撃ったが効果全くなし。やがて水島工場の上を巡回、今度は高射砲で撃つたけど、弾はかなり下の方、敵はゆうゆうと旋回して飛び去った。

小学生の炭焼き

中和国民学校では炭焼きを本気でやった。炭焼き窯は青年学校指導員の越峠さんが造つてくれた。一回に一〇俵ほど焼ける。木材切りは高等二年男子で、私の仕事。ニキロほど離れた林に入り、ブナ、クヌギ、ナラなどの木を倒す。切り方を知らぬと困つたことになる。時には大けがをする。広い平地に立つた木を倒すのなら易しいが、相当な傾斜のある山に入り、色々な大木の茂る中から選んで倒すのだ。思う方向に倒れないと困る。下の立木に、倒す木の枝が引っかかったら、ゆすつても動かしても容易に倒れなくなる。時には根本の方がぶうんと持ち上がり、くるつと回転して人をなぎ倒し大けがをする。初めにくさび型に倒す方向に斧を入れ、反対側を少し上から鋸で切っていくのである。易しいようで注意がいる。木材の運搬は全校生徒。一年生から高二女子まで、細いの太いの、ぞろぞろ列になつて窯まで運ぶ。持ち帰った木を全部適当な長さに切つて窯の中にびっしり立てて隙間なくつめる。少しでも隙間があると、

小さい木をつめる。そして火を入れる。初めは真っ白い煙、水蒸気である。四、五日すると薄紫色になり、やがて無色になる。一週間ぐらいかかったらどうか。それまで焚き続けられないといけない。それから窯を完全に密封する。三、四日して口を開けば、奥の方に炭が重なっている。かき出して俵に入れれば結構あるものだ。生徒の中には、高二となると、親につれられて本式の炭焼きをしている子どもがいるから、私の方が教えてもらう。なかなかしゃんとした子どももいる。夏は夕立に合いびしょ濡れ、冬は山腹で雪の舞う谷風でふるえながらの昼食もたびたびだった。これもお国のため。この頃から授業時間が段々と減っていった。

戦意昂揚のための学徒動員

昭和十八年、この年もいろいろなことが起こった。日本軍のガダルカナル撤退。山本五十六戦死。陸軍少年兵募集、一四才以上、国民学校卒業後直ちに志願可能。平岡は予科練航空兵の卵、柴山は海軍志願回天特攻隊へ(生還)。少年兵志願のことは卒業後なので学校側はかわらなかつたが、満蒙開拓青少年義勇軍の選出については厳しかった。時が来ると視学官と学校係教諭の面接があり、河本視学官などは「義勇軍が出せないようなことでどんな教育をしているのか!」と維新小学校の渋谷先生をひどく叱りつけたのを覚えている。私の学校は教頭がきち

んと決めていてくれて、OK。少年は二人とも無事帰国した。学徒動員要綱決まる(六月二五日)。学徒出陣。この光景は実にはつきり記憶している。「いよいよ来たか。俺たちの召集も近い。」という感慨だった。中和国民学校でも動員が始まった。男子八名は玉野の造船所。女子三名は水島の三菱飛行機製作所(編集者注:三菱重工(株)水島航空機製作所のことか)だった。

造船所では小型の特殊艦艇を造っていた。すごい騒音である。ダ、ダ、ダア、ダアという鋸を打ち込む音。パチ、パチ、パチと熔接の火花、大きく振り回されるクレーン。地上を這う高圧線。「もつとノルマをあげろ。」と、造船所長が寒中憲兵によつて氷風呂に入れられる始末。実にすさまじい有様だった。生徒の宿舎は、まるで蚕棚。三段ぐらいのせまい棚になっていて、どうにか身を横たえて眠るのである。「曲まがり」という一生徒が、とうとう気が変になつてしまった。静かなのんびりした田舎の百姓家の子どもが、いきなりこんな環境にほうり込まれたのだから、一人や二人異常者が出て当然だろう。すぐわたしが連れて帰った。幸い帰郷後すぐ治つた。

水島工場には高二の女子が全員行つた。だだっ広い平地に一階あるいは二階の長い木造の工場、宿舍が何棟も立ち並んでいた。すごい人数だった。日産三機。双発。パイロット万年筆型の

海軍機だった。しかし、私たちが引率教師として行つた頃には、組立て工場の工員は皆焚火をして外でわいわい遊んでいた。腹立たしくなつたので、「君たちどうして仕事をしないのか」とぶつつかつたところ、「部品がないんじや。特殊金属がなく、出来んのじや」との返事で、飛行機は組み立て半ばだった。向こうの小山には地下トンネルが掘られ、地下工場が造られるというのに。その中空襲の心配が強くなり、私たち真庭郡の女生徒は金光教の宿舎に移つた。引率の教師は三人。一部屋に一つの学校の子ども。

私は中和と美甘の受持ち。朝、広場で朝礼。工場の係員に生徒を引き渡す。夕方五時頃夕礼で受け取る。仕事は殆どなく、時々鋸選り、後は歌つたり踊つたり、劇などして遊ぶ。一回だか父母の慰問があつた。食糧難だったので、大きなかますに大豆、栗を炒つていっぱい入れてあつた。私たちは日中ひまで、金光さまの客殿を見て、トイレの立派なこと、縁側のきれいなこと、床の間のすばらしいことに驚いたり、小道を歩いて焼き物(陶器)の残りをあさつてみたりした。一二月になり動員解除となつたので、布団袋など金光駅に運んで引率して帰った。中和は雪で、真加子峠で朝鮮出身の安田菊ちゃん、へなへなと腰がぬけたようにうずくまつた。日本のためにこの子もこんな目に合つたのかと理不尽に思えた。そして、又、私が動員に参加した為に、残つた生徒はどう扱われたのか、後ろ

めたい気持ちだった。子どもを動員して、どれだけ役に立ったのか、半ば腹立たしかった。

青年学校の坂本先生と越峠曹長

私は、小学校卒業後青年学校に一年行った。青年学校は普通科が二か年、毎日農業と教練を学んだ。本科五年、研究科が一年。週一日だけで、教練が主だった。青年学校へ行っていないと軍隊に行つてから困るということだった。教師が一人、指導員が一人だった。教師は坂本先生。高松農学校卒、特待生で極めて研究熱心。着任後も文検二科目「農業経済」「修身公民」に合格され、青年にも信望が厚かった。後に勝山中学校長になられた。指導員は越峠九一さん。陸軍曹長、下士官の一番上(昭一六)でなかなかの人格者。満州事変、日中戦争に参加された歴史の兵。誠におだやかな人だった。私が教師として国民学校に務めた頃、職員室に同居したので、時々宿直室で数人の教師と一緒に酒を交わしながら、戦争の話をよく聞いたものだ。「中国大陸の戦いは全く点(日本軍の駐留地)と線(日本軍の行軍した道)としてさえも残ってはいない。去った後は元の木阿弥。支那の兵隊はけっこう強いよ。」(「負けて逃げるはチャンチャン坊主」と中国兵をあなどった頃)等々実戦の話を詳しくしてくれた。

戦争——本当のことを知るには

私が戦争のことを知ったのは、こうした戦争帰りの人から、徐州戦のこと、初年兵の肝試し(中国人の刺殺)、慰安婦のこと、ビルマの戦い、三光作戦、強姦のことなど沢山ある。慰安婦のことなどは、経験者が言うのだから真に迫っている。「俺らは朝鮮ビー。偉いさん(将校)は日本人。何人も並んで順番を待つんじや」と。また、ある街を占領し、高樓に上り、双眼鏡で街中捜すも女は見つからない。よくよく捜すと一人見つかった。「それ」とばかり兵一人つれて捜すとトイレの壺の中、引き出して水をぶつかかて洗い、強姦。あとは、ズドンと一発。初めのは加藤伍長、あとの話は河本兵長の話である。また、徐州戦では大隊長を戸板にしびりつけ、城壁に吊るし、「くやしかったら取りに來い」の敵声にじんだんだを踏んだ話も聞いた。今日これらがいるいろと歪曲されているが、実に妙なことだ。

戦争文学も随分読んだ。徐州戦の火野葦平の「麦と兵隊」「土と兵隊」。大岡昇平「俘虜記」「レイテ戦記」「野火」。五味川純平の「人間の条件」等々。ずい分暇つぶしに読み耽ったものである。又、戦後になって、無事生き残った友達からも好んで聴いた。奈良町の高取少佐の沖繩戦(女郎と同居の牛島司令官。戦艦「伊勢」に乗った八出(津山市)の順江兵曹の海戦のすさまじさ。久世の大谷君のタイシエットまで連れて行かれたシベリア抑留物語等々実に沢山で

ある。放課後ストーブを囲んでは何日も聞いた。ニュース源のいちばんは帰還者の話。これは殆ど事実で、次が小説。ここまではあらかた信じられる。

次は新聞だが、これは半信でも半疑。「日軍百万杭州湾上陸」「真珠湾攻撃」「東条の姿」「学徒出陣(神宮外苑)」「特攻出撃(田中高正中尉)」「広島・長崎原爆投下」等は、みな新聞の写真で脳裏に焼き付いている。しかし、虚偽の報道、誤報、誇大報道、過小報道、隠蔽。軍にあやつられた報道が実に多かつたことは事実である。

「敗戦」が信じられなかつたり、いつか、どこかで日本軍は勝つだろうと信じたり、「神風」が吹くとまじめに信じたりしたのは滑稽である。報道の罪である。この罪は実に大きい。そして今日といえども油断はならない。私たちはイラクのこと、アフガンのこと、自衛隊のことをどれだか知っているだろうか。当時テレビはなく、ラジオからすばやく聞くことが多かつたが、これがどれだけ国民をだまし、おだてたことだろう。一大事では政府は信用ならない。

芋掘り・授業なし

昭和二〇年、私は津山第二国民学校に転出した。女子校である。女の子ばかり、一個学年三学級。私がいちばん若輩。指導計画は主任がたてる。今日も作業、明日も作業。芋畑造りである。運動場の一角、二角を掘って畑とする。な

かなか土地が固く、女の子の手では容易に耕せない。合間に運動場を行進させていたら、道を歩いていた憲兵がいきなり怒鳴った。「やれ恐ろしや」と思っていたら「号令を掛かる時には不動の姿勢でやれ」というのだ。急いで不動の姿勢を取った。当時私は下駄ばきだったのだ。泥棒が多く、靴は取られてしまい、下駄しかなかったから。近くのキリスト教図書館(キリシタン時代からの実に貴重な蔵書が多いのだが)を撤収して、憲兵が五、六人すわり込んでいた。

もと図書館高校があったのだが、軍事教練を要求され、館長(校長)の森本敬三先生が拒否され、腹いせに憲兵が居座ったというわけである(岡山の清心高女よりは、はるかにまし)。城山のてっぺんにも芋をつくっていたので、明日は芋掘り、「皆籠を持って来い」という訳で、皆喜んで城山に上ったのだが、掘れども掘れども出てこない。わずかに三つだけ。一同がっかり。近くの住民も飢えていたのだ。

哀れ、級友の死

この敗戦の年、授業したのは二時間か三時間。ああ、これでも教師か！とところで、私たちのクラスは、前後に比べて圧倒的に戦死者が多い。陸軍では中尉か伍長、軍曹。海軍でも中尉か二等兵曹というところである。戦死者の中で記憶している者を二、三名挙げてみよう。落合町出、田中高正君。高等工業卒。ただ一筋、勉強か柔

道。極めて真面目。第二次沖繩戦への特攻隊。五機編隊、隊長、海軍中尉。おそらく南支那海で撃墜されただろう。敵の磁気爆弾で。二階級特進、海軍少佐、金鵝勲章功四級、皇后陛下の御歌を賜る。彼が最後の家族宛の端書を見せてもらったが、練習機に片手をおいて「やつと覚悟が決まりました」と記していた。生きていたら、きつと大企業の重役になっていたに違いない。

次は、新庄の岩田周君。彼は師範時代ひたすら剣道に生きた男。剣道の岩田か、岩田の剣道かと言われた男。四段(今なら六段ぐらい)、陸軍中尉。比島戦でフィリピンゲリラの討伐に向かう。敵は自動小銃、地の利は彼にあり、その上空から米軍機の支援、こちらは三八式歩兵銃(明治二八年製、当時は皆これ)、一発ずつ、ぼつん、ぼつん。これで戦えるわけがない。彼の剣道も役にたたず、惜しいことを。悲しいことだ。

中和の武内百美君。彼は小学校の同窓。ずっと級長、おとなしく、無二の親友、熊本薬専卒。出征お別れの宴で、父君のいわく、「欣爾君、百美は初任給七五円もらっているんだ。」と自慢された。私の初任給は五〇円。いいなとは思ったが別にうらやましいとは思わなかった。雪道を送る途中、「おれは嫁をもらって出たかった。」とこぼした。私は即座に、「何を言うんだ。戦場で後ろ髪を引かれるぞ。」と答えた。彼は、「そ

うだな。」と言い残した。入隊して一か月ほど立った頃、妹の俊子さん(同じ職場で働いていた)が面会に行った。衛門入ってしばらく行くと、誰か歩いて来る。向こうから男が、「俊子、わしじゃがな。」と声を掛けてきた。よく見るとまぎれもなく兄である。顔は黒くじて(黒いあざができて)腫れ上がり、ゆがんで何とも言えない情けない顔だった。「お母さんには言うなよ。」と強く念を押した。その兄は、やがてビルマ戦線、あの牟田口廉也のインパール攻撃である。

「見る、あの山、あの原野を。緑青々と茂っている。人間はもと草食動物じゃ。いざとなれば、あれを食べばいい。食べ物が無いとは言わさんぞ。」と食料も兵器弾薬もないのに死地に追い立てたという。ビルマ飢えの退却である。武内君はかわいそうに、シツタン川をよう泳ぎ切らんで死んだという。哀れな話である。生きていたら、立派に薬剤師としていい嫁さんをもらって、楽しく働いたろうに！

死者について記せばまだいくらでもあるが、省略する。この三名は皆同郡の同級生である。惜しみても余りがある。

人命軽視

いつの頃から日本は人命を軽んじる国になったのか。天皇制がからんでいることは言うまでもない。万葉集の中から、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なぬ、顧

みはせじ巻一八、大伴家持元海軍儀式歌」。武士道とは死ぬことと見つけたり(葉隠論語。丈夫は瓦となつて全からんより玉となつて砕くべし(北斎書。殿の馬前で討死にしてこそ名譽なり。腹切り。切り込み隊。決死隊。特攻隊。「靖国で会おう」。「軍馬、銃は大切だが、兵は一錢五厘」。戦艦大和の特攻攻撃二七四〇名の犬死。「大本営に全員玉砕したと報告したので、お前たちに生きていてもらつてはこまるんだ」と切り込み隊に無理やりさせた隊長。日本人は誠人命を軽んじ、死を鴻毛の軽きに比し、死を美德とした。あるいは、武家政治、封建社会、天皇制が長く続いた為だろうか。「又チドウ宝沖繩」こそまことの言葉である。

悔み

私は五年間戦争中を過ごした。良い教師だったとは更に思っていない。第一、授業をしなかつたこと。第二に、作業、動員に従わせたこと。第三、教育らしい教育をしなかつたことである。ただ、戦争の話、戦意をかりたてるような話、勇ましい話は、殆どしていない。これは、父の教えに基づく。父は早くからこの戦いに疑問を抱いていたし、勝つとも信じていなかった。それに常に「良鉄は釘に打たず、良人は兵に当たらずじゃ」と、子どもに言っていた。五人の男の子軍人になつた者はいない。戦争中だから、上からの命令、指示だから、国全体が、世の中

がそうなんだからと言ひ逃れはできない。何とか少しでも、子どもたちをかばうことはできなかったか、教えてやることはできなかったかと後悔するのみである。四年間はこのくらいで封印したい。

追記1. 宗教の国、日本

第二次大戦は、日本、ドイツ共に戦つて惨敗した。共に全体主義の国、侵略国家として悲惨な負け方をした。本国の蹂躪されたことはドイツの方がひどかった。然るに戦後の復興の姿は、大変異なっている。日本は経済的には世界第二位となつたと言うが、国際的にはどうだろうか。外交面はさつぱりである。ドイツは、殉教者ボンヘッファーが心に描いた通り、EUとなり、近隣諸国とはすつかり仲良くなつてナチスの問題はすつかり片付いた。日本はどうだろう。朝鮮人、中国人にひどく嫌われている原因は、日本が歴史を正しく顧みず、彼の国に心から謝罪しなかつたからだ。(蒋介石は、「暴に報いるにうらみを以てせず、徳を以てす(老子)」賠償放棄、即時帰国、残留孤児と養父母) 日本は史実を歪曲して、あえて反感を買い、恩義を仇で返した。

これは、結局、日本人の信仰に起因する。日本は宗教のデパートと言われる。宗教団体は数多く、神社、仏閣は至る所にある。偶像是数限りない。家内安全、五穀豊穰、交通安全、入試

合格云々と、それぞれに拜む先がある。神社、仏閣の年中行事は盛大に行われる。これらは「宗教」行事、習俗である。しかし、「信仰」とは別ものだ。日本には宗教は溢れ、信仰は誠にとほしい。国家として、民族としての信仰は無い。

かつては天皇崇拜があつたが、ここに重大な欠陥がある。翻つてドイツはどうであろうか。ドイツは宗教改革の国、ほとんどがプロテスタントである。「プロテスタント」とは抗議、神が我々に抗議し給うことである。しかし、大多数がヒトラーに迎合し、抵抗したのはごく少数である。然し、その中には実に優れた立派な人がいて、ナチスと徹底的に戦つた。グスタフ・ハイネマン、マルチン・ニーメラ、デイトリツヒ・ボンヘッファー、ファンズ・フォンドナーニ等々で、この人たちが戦後のドイツの進むべき道を命をかけて示した。時代の先駆者である。

中でもボンヘッファーは二一歳にして神学博士、二四歳で大学教授、ベルリン大学で教えるようになった天才的な人物で、唯一の反ナチ告白教会をリードしていった。二〇世紀最高の人物である。惜しいことに三九歳にして、ヒトラー自殺の二〇日ほど前に処刑された。然し、その教え、神学は今日に受け継がれ、脈々と生きていく。キリスト教では罪を犯しても、心から悔い改め、告白すれば許されるという強い信仰がある。旧約聖書のダビデ王、新約聖書のペ

テロ、パウロ皆それで、後のアウグスチヌス、フランシスコも皆そうである。

日本にはこの伝統がなく、「落んだことは水に流せ」という思想である。過去を消そう、取り繕おうとする。その為、中国に反発され、韓国に反発される。侵略戦争ではないと言い、南京大虐殺、慰安婦問題等々、次々に消し去ろうとする。A級戦犯は犯罪人に非ず、十五年戦争は侵略に非ずとさえ言う。

翻ってドイツを見れば、ドイツには「罪責告白」ということがある。バルメン宣言、ボンヘツファーの宣言、シュツットガルト罪責宣言、ニーメラの宣言、ダルムシュタット宣言、ラインラント州教会の総合決議と次々続き、一九八五年のヴァイツェッカー大統領のこの演説は、岩波ブックレットに全文が出ているから読まれた方もあるだろう。二七、八頁におよぶ大演説で拍手に継ぐ拍手。聴衆の議員に深い感銘を与えた。大戦中ドイツの犯した罪を悉く教え上げ、胸をつまらせ絶句し、深く謝罪している。ユダヤ人のこと、ソ連、ポーランド攻撃、ドイツ兵の死、空襲、シンティ・ロマ、障害者、レジスタンス等々二〇項目ほど教え上げている。実に堂々たるものである。この中には、歴史に残る名言がいくつもある。しかのみならず、戦後いち早く大統領、首相が隣国を訪れ、慰霊碑にぬかづき、地にひれ伏して涙ながら罪の許しを乞い折っており、見る人皆心打たれたのである。

かくして、近隣との和が成り、今日ではオーデー川の橋を渡ってポーランドの学生がドイツの高校に学ぶという間柄になったのである。共同の歴史書も作った。

そして、このような罪責宣言の手本とすべきものが、ボンヘツファーの著「現代キリスト教倫理」に出ている。これは牧師研修所が閉鎖され、講演も禁じられた一九四〇年から投獄されるまでに書かれた本、未完、B6版ライフワーク。七頁にわたり六千字ほどで詳しく論じられている。個人的な罪と共に、教会の罪を列挙している。二、三引用してみると、教会は、その見張人としての役目と慰める役目をしばしば怠った。教会は暴力的行為と不正が行われるのを見過こした。教会は告白する老人を軽蔑し、青年を祭り上げることに反対しなかった。教会は告白する、教会は十戒をすべて破るといふ罪を犯し、教会は貧しい者たちが収奪され、搾取され、強い者たちが富みかつ腐敗していくことに對して沈黙し傍観していた。等々次々と並べ上げ説き進めている。以下割愛するが、日本の天皇のことば、村山さんの謝罪などは全く問題にならぬ。日本キリスト教団が罪責宣言をしたのは、一九六七(昭和四二)年、日本キリスト教団総会議長鈴木正久氏が初めの終わりである。ここに根本的な違い、一大欠陥がある。日独の歩みの違いは、信仰からきている。

追記2. 吉田松陰の二と

吉田松陰の松下村塾から出た伊藤博文が明治憲法を作り、教育勅語を作り、この人のもとで教育総監が軍人勅諭を作った。明治憲法の天皇の地位についての三力条(天皇が大日本帝国を統治する、天皇は神聖にして侵してはならない、天皇は陸海軍を統率する)が、明治以降の国の進む方向を決めたと言ってもいいと思う。そのために富国強兵の道から戦争に突入したわけだ。松陰の思想は極端な右翼であり、松下村塾で極端な勤王思想を「講孟箭記」により述べている。又、「草莽崛起」の過激な策を獄中より指示している。

追記3. 朝鮮の人

一九二七(昭和二年)、わたしの村の真加子峠にトンネルを造ることになった。山を切り割ってコンクリートで固めたトンネルを造り、トンネルの上をまた土で埋めるといふ造り方だった。その工事を朝鮮の人がした。工事で二人の死者が出て、「アイゴー、アイゴー」と泣いたという話だ。朝鮮人たちは私の家の向かいを借りて住んでいたで、暮らしの様子がよく見えた。彼らは時々ひどい口げんかをしていたが、絶対手を振ることはなかった。仕事から帰って二階で煙草を吸う姿が、まことにゆつたりして大陸的な感じがした。はじめて「もやし」を見たのも

この時だ。砂糖を唐辛子と交換してくれと言って来たりした。掃除洗濯をきっちりしてとても清潔な暮らしぶりだった。

ある時巡査がサーベルでひどく朝鮮人を殴っていたのを見たことがある。「ひどいことをする」と思った。低賃金であつたため、「ブーなんぼ」と賃金の歩合についてよく聞いていた。結婚式に招かれて行ったら、鶏の足をくくつて供えてあつたのには驚いた。後に、朝鮮人の子どもを二回担任した。金城と安田という子だが、子ども達に差別意識はなく、仲良く過ごしていた。朝鮮の子どもも学徒動員で水島へ連れて行つた。この子が帰りの雪道で腰が抜かたようになつた。よその国の動員で、えらい目にあつて、ようやく家に帰れると思つたら、ヘナヘナとなつたのだろうと思う。子どもなりに大変な思いをしたのだろう。

奈良の大仏も焼き物(伊万里焼など)も朝鮮の技術でできたし、高松塚古墳の絵も朝鮮半島にある絵と同じだし、文化は半島を通じて伝わってきていた。それなのに終戦まで七二万五千人の朝鮮人を日本に連行して鉱山や工場、土木工事などで重労働をさせた。朝鮮の人から土地を奪い、職を奪い、名前を奪い(創氏改名)、言葉(朝鮮語)を話してはいけない)、おおよそあつてはならぬ植民地政策、皇民化政策の歴史がある。村落の人を教会に押し込めて火をつけて焼き殺した堤岩里事件も有名だ。従軍慰安婦

の問題もある。朝鮮の人が日本に対して腸が煮えくりかえる思いをしているのは当然だと思う。こういう歴史が日本にあることを知っておかないといけない。

編集者注

「満鮮旅行」の項は、簡条書きの初稿を当時の心情を再現するように書きかえてもらった。そのため現在使用していない歴史用語が使用されているが、戦時期の社会的雰囲気伝えるためにあえて修正しなかった。